

震度6弱はこうなる



地震の衝撃で半壊してしまった木造家屋。幸いにも住人に被害はなかった。しかし、ここにこのまま住むことはもうできない。
(写真提供：牧之原市)



2枚の写真を見てほしい。
8・11の地震で震度6弱を記録し
広範囲に被害が発生した御前崎市と牧之原市のもようである
2市を襲った揺れは、家屋、道路、水道など
生活に密着した部分に、多大な影響をおよぼした
震度6弱は、東海地震が発生した際の「本町想定震度」
この写真に映し出される悲惨な光景は、
決して「対岸の火事」ではない

激しい揺れに絶えきれず、すべてなぎ倒されてしまったブロック塀。
奥にあるガスボンベが破損していたら、大惨事になっていた可能性も。
(写真提供：御前崎市)

震度6弱をレポート 2市の市職員に聞く



家中の耐震対策や、被災時の行動などを考え直す必要があります

牧之原市役所
秘書広報室
加藤浩長さん

子どもを抱えうずくまった
わたしは地震発生瞬間、妻の大きな声で目が覚めました。驚きと不安の中で、0歳の子どもを抱えたまま、ただ揺れが収まるのをやり過ごすことしかできませんでした。
揺れが収まり、わたしはようやく落ち着きを取り戻し、部屋の中を見渡してみました。
大きな家具には突っ張り棒を装着してあったので、幸い転倒だけは免れていました。しかしそれでも、数10センチも移動した形跡があり、地震の激しさを物語っているように思いました。
棚の上に置いてあった物は床に

落ち、足の踏み場もないくらい散乱していました。
電話機の横に水槽が置いてあったんですが、地震の衝撃でポンプが床に落ち、水がかかった電話機はもう使えなくなっていました。
家族の安否や家の状況を確認したあと役所に登庁しました。役所に向かう途中では、屋根瓦が落ちた家がたくさんあり、多くの人が道路に出て、自分の家を見上げていました。昔ながらの瓦屋根の家が被害が大きいと感じました。屋根の応急処置として、ブルーシートが使用されましたが、市で備蓄している量だけでは全然足りませんでした。量販店では、すぐに売り切れてしまう状態でした。
また役所では、断水への対応に追われていました。静岡市や消防署が給水車を派遣してくれましたが、断水地区は広範囲にわたっており、復旧に時間がかかりました。
耐震対策を見直さなければ
「もしこれが東海地震だったとしたら...」。わたしはそう思わずにはいられません。「家具の固定だけではダメだ」と、つくづく痛感したのです。もう一度、家中の耐震対策や、被災時の行動などについて、家族で話し合う必要があると思っています。

震度6弱をレポート 2市の市職員に聞く



大切な人を守るため自分に何ができるだろうと考えています

御前崎市役所
秘書広報課
山崎良さん

突然の揺れに、ただ呆然と
地震発生当時、わたしは暑さで目が覚め、うとうととしていました。そこを突然大きな衝撃に襲われたのです。
横揺れの激しさに、家が音を立ててきしみ、わたしはただベッドにしがみついて耐えることしかできませんでした。揺れが収まっても頭はパニックのまま。しばらくは呆然としていました。
静岡市の実家に帰省中だった妻から「こっちは大丈夫。子どもも無事」という連絡が入り、ようやく

くわれに帰りました。
家の中には、冷蔵庫が約30センチも動き、写真立てはすべて棚から落ちていました。食器棚の中の食器も割れていました。
急いで市役所に登庁すると、そこは電話の嵐。報道機関や市民から、問い合わせや相談が殺到していました。
被害の状況調査に向くと、瓦が落ちてしまった家や、崩れてしまった茶畑、舗装が割れ路肩が決壊している道路など、被害は市内各所に広がっていました。
特に被害がひどかった地区の人に話を聞くと、「家が歪んでしまい、玄関の扉が開かなくなってしまった。あと数10秒揺れが続けば、家は崩れていたかもしれない」と話していました。
人々の心に植え付けた恐怖
8月の地震は、わたしたちの心に「大地震への恐怖」を植え付けました。今でも、強風で家がきしむたびに「東海地震か？」と身構えてしまうほどです。災害時、大切な人を守るために何ができるのだろうと、常に考える日々が続いています。